

服飾デザインと国際アートマネジメントの 実践的研究 －地域資源を活用した クリスマスファッションショーを事例として－

A Practical Research on the clothing design and International of Arts Management
: a case study on Christmas Fashion Show inspired by the regional resources

水谷由美子*・田村未奈美**

Yumiko MIZUTANI, Minami TAMURA

1. はじめに

筆者の研究室では、2002年から地域資源を活用したテーマで、山口市内でクリスマスファッションショーを開催してきた。今年で7回目を迎える。なぜ、クリスマスファッションショーを開催するようになったかという、日本のクリスマスは山口ではじまったからである。フランシスコ・サビエルの2度目の来山で、時の山口の殿様であった大内義隆公にキリスト教の布教が認められた。その際、サビエルは派遣主であったポルトガルのジョアン3世からの贈物を義隆公に渡し、その返礼として布教する場所として大道寺をもらった。

そこで、1552年に日本ではじめてのクリスマスのミサが宣教師コスメ・デ・トルレスらによって日本人信徒が招かれ夜を徹して行われたことが、『完訳フロイス日本史6 大友宗麟篇I』に記載されている。山口の文化創造を考える上で、この史実をストーリー化することは魅力的なテーマと考えて始めたのである。

今年は、山口が大内弘世によって町として築かれた650年目と考えられており、市内では山口開府650周年という名目で、シンポジウムやコンサートなどが行われている。特に3年前から日本のクリスマスは山口から実行委員会が立ち上がり、11月から12月にかけて行われる市内の事業を共同で広報して行こうという活動が継続してきている。

今年は著者の研究室が中心に組織している山口県立大学服飾研究会では、山口オリジナルクリスマスソングコンテスト、ファッションショー、キッズファッションワークショップとその発表を企画し、地域メセナの

団体に応募して一部費用の負担を得ることになった。企画効果を考えて、筆者が属する山口県立大学とフィンランド国立ラップランド大学とが学術交流提携を締結したことを記念して、ラップランド大学から学長団が本学を訪問する12月中旬を今回のイベント全体のタイミングとして想定した。

すでに2005年に大学の講堂にフィンランドからサンタクロースを招聘した経験がある。ラップランド大学が位置するロバニエミ市には世界でも有名なサンタクロース村があり、ここのサンタクロースがEU公認で権威がある。よいタイミングがあれば、きっとロバニエミからサンタクロースが呼べるのではないかと信じて、企画を立てた。

準備を進める内に10月の段階で、上記計画は組織が拡大され大学主催のイベントになり、諸機関からのメセナ助成を受けることをやめた。それ故に、アートマネジメントの枠組みとして社会性が少し弱まり、筆者が属する組織のプロデュースとなったわけである。

そこで、江里健輔学長総監督のもと、木村泰則経営企画部長が制作を担当し、フィンランドのロバニエミ市やラップランド大学との交渉をシャルコフ・ロバート国際化推進室長にお願いすることになった。企画は山口県立大学国際文化学部文化創造学科が中心になり、その他大学院国際文化学研究科と国際化推進室が共同企画となった。筆者は企画の主担当を務め、全体の総合演出を行うことになった。また、田村洋教授が総合プロデュースを行うという構成で、組織が固まった。

そこで、今回はクリスマスファッションショーを核

*) 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授

***) 山口県立大学大学院国際文化学研究科2年

****) ルイス・フロイス 松田毅一・川崎桃太共訳『完訳フロイス日本史6 大友宗麟篇I』中央公論新社、2000年、85頁

として、すでに文化創造学科で決まっていたサビエルおよび大内文化と関わりのあるクリスマス文化についての展覧会とサンタクロースとの交流会を併設させることになった。そして全体のタイトルは「クリスマス・インスピレーション」と命名されたのである。

そして1500名収容可能な山口市民会館の大ホールと展示ギャラリーで、1日の大規模な企画を実行することになったのである。

本論では、特に服飾デザインを中心にフィンランドとの関わりから生まれたこの企画をいかに運営したかを検証するために、「服飾デザインと国際アートマネジメントの実践的研究 - 地域資源を活用したクリスマスファッションショーを事例として」とした。

すでに述べたように山口県立大学服飾研究会は2002年12月にはじめてのクリスマスファッションショーを山口市の中市商店街にあるNACにて実施した。この年の4月から9月まで筆者はヘルシンキ芸術デザイン大学大学院UIAH（現アールト大学）に客員教授として滞在し、フィンランドとの繋がりができた。まず、最初にフィンランド人と日本人のダブルである若手デザイナー、新留直人氏をジャパン・ファッションデザインコンテスト山口（同名実行委員会主催、筆者は理事の一人）と新しく立ち上げたクリスマスファッションショーに招聘した。

同時に、この年はフィンランドを代表するテキスタイルとファッションのブランドマリメッコ社から生地を提供を受けて、マリメッコとのプロジェクトを開始することができた。服飾デザインの領域で、一気にフィンランドとの繋がりが開始され、その後、毎年のように当研究室や山口県繊維加工協同組合（現理事長は岡部泰民氏）が共同で、フィンランドで毎年選ばれるファッションデザイン分野のフィンランド若手イヤーオブデザイナーを招聘し、交流をしてきた。

2007年には井生文隆教授のマネジメントによって、ラップランド大学においてはじめて10周年記念ファッションショーに4名の学部および大学院学生を伴って参加した。2009年から3年計画で国際文化学部の国際共同研究（スタッフは筆者をリーダーとして、井生文隆教授、田村洋教授、小南英昭教授、松尾量子准教授、山口光准教授、小橋圭介講師）を立ち上げ、まず2009年には筆者が現地においてファッションワークショップを実施した。

2010年11月8日から4日間、井生教授、田村教授、松尾准教授と筆者が、ラップランド大学を訪問し、2度目のワークショップを実施した。このワークショッ

プの成果をも含めてクリスマスファッションショーを行った。ただ、国際共同研究の成果については、共同研究グループの成果として、別の機会に発表するので、ここでは詳細に触れることはできない。

9年間のフィンランドとの関わりや経験そして温めてきた人間関係などを生かして、クリスマス・インスピレーションを企画することにした。

以下では、主に市民会館大ホールにて実施したい公演部分を中心に、事実を記述するとともに、実施に至る経緯や内容を踏まえて、服飾デザインおよびアートマネジメントの方法や可能性について検討するものである。最後には、プログラムと写真による記録を資料として添付する。

2. サンタクロースをファッションショーに招く

2010年4月に山口県立大学学長一団がラップランド大学を訪問した際に、マウリ ウラ・コトラ、ラップランド大学長の計らいでロバニエミ市の関係者とミーティングをした。この出会いがきっかけで、5月にロバニエミ市経済部長エルッキ・カウト氏とロバニエミ市の外郭団体地域開発機構長ユハ・セツバラ氏が、山口市を訪問することになった。この時に二人は山口県立大学学長の紹介で、山口市長を訪問した。山口は日本のクリスマスの発祥の町とサンタクロースの世界の中心の町が交流することを望んでのことである。山口市は現在のところ、すぐに交流を開始するという方向には動いていないが、興味もたれた。

次に彼らは山口商工会議所青年部が中心に組織されている日本のクリスマスは山口から実行委員会とのミーティングをした。筆者はこの委員会の委員の一人でもあるので、このミーティングに参加した。

ここで筆者はサンタクロースを山口に送ってほしいというお願いをした。非常によい感触であったが、上記委員会ではすでに多くのイベントが決定されており、受け皿がないという返答であった。ただ、ロバニエミ市が開設している世界のクリスマス文化を紹介するスペースに上記委員会の活動などを展示する方向性については合意された。

さらに、カウト氏とセツパネン氏が山口県立大学国際化推進室を訪問することになり、筆者はヨーロッパパトリダーでもあることと、クリスマスファッションショーを企画しているので、ミーティングに参加した。そこで、改めてまたサンタクロースをファッションショーに派遣してもらうことをお願いした。すると非常に好意的な返事が返ってきた。同時に、ファッ

ション分野の教員や学生も派遣してくれるとうれしいなどをお願いした。すると、これについても非常に好意的な返事だった。

それ故に、この時の交渉の返事を信じて、山口市民会館大ホールを本格的に予約し、内容を構築していった。しかし、10月の段階ではまだ確定はされておらず、確認を取る必要があった。ロバニエミ市側からラップランド大学へも連絡がいないようであった。いよいよ10月の下旬になって確定をする必要が出てきて、シャルコフ国際化推進室長が時差を超えてロバニエミ市に連絡をとり、やっとのことでサンタクロース派遣の確約をとりつけた。

大学教員と学生については、ロバニエミ市の担当者は、シャルコフ氏の電話を受けた次の日に大学を訪問し、筆者のグループの共同研究代表であるマルヤッタ・ヘイッキラ・ラストス教授（ファッションデザイン専門）とクリスティーナ・ハンニネン教授（テキスタイル専門）に会い、彼らへの支援を約束した。その結果教員3名と大学院生1名がファッションショーのために来山することが決定した。

サビエルとサンタクロースそして山口開府650周年という関係が、偶然にもいい風を吹かせたようだ。

本学での交渉の時に、筆者はすでに山口市民会館大ホールを予約していた。コトラ、ラップランド大学学長団が来山する予定の12月10日～14日の間の週末はすでに予約がいっぱいであった。それ故に、やむを得ず12月13日を予約することになった。この日は月曜日である。それでも、ロバニエミ市の担当者には、1500名収容（その時は詳細を知らずに1700名収容と言った）できるホールをすでに用意している。また、ロバニエミ市を紹介するパネルやビデオなどを設置することも可能だ。ロバニエミのサンタクロース村を紹介することもできる。相手がメリットを感じてくれるような提案を以上のようにいくつかしたのである。

実際のショーには、1000名を超える観客が雨の夕方に集まった。観客動員には木村泰則経営企画部長の努力が実ったと言える。当初は近所の小学校5校をターゲットに、木村氏が整理券をもってあいさつ回りをした。その結果、学校として整理券を配ることに同意したのは山口市立宮野小学校、山口市立大殿小学校そして山口市立白石小学校の3校であった。広報は言うまでもなく、地域の各新聞社、テレビ局そしてラジオなどに投げ込みを行った。

広報担当には経営企画部の丸山絵里氏をはじめ、筆者の研究室の学部生、大熊和樹と鮎川真琴そして大学

院生、松永美代子と木村和枝が参加した。1500枚作成された整理券は公演までにすべて配布された。同時に、一般申し込みとしてメールアドレスを開設しそこに自由に申し込むシステムにした。無料の公演だが、整理券や申し込みによる人数把握は重要である。なぜなら、観客の動向が読めないと、最後の宣伝広報の追い込みができないからである。

その結果、みごとに1000名を超える観客を招くことができ、幸にもロバニエミ市やサンタクロースの好意に報いることができた。

ショーの後でサンタクロースとのミーティングをした。彼はEU公認のサンタクロースなので、あまり商業的な招聘はなく、多くの場合には堅苦しい挨拶が続くような場に招かれると聞いた。今回はサンタクロースの歓迎ショーを企画し、フィンランドでサンタクロースを助けるトントウという小人の妖精をテーマに、大殿小学校合唱部の歌やリル・レイダンススタジオの子供たちの踊り、そして大学院生、岡田奈緒が実施したキッズファッションワークショップ（講師は当研究室の修了生、片山涼子）の発表などいくつかのショーを繰り広げた。

一般的にはどこかの機関がサンタクロースを招聘し、直接、やり取りがあるのだが、今回はロバニエミ市が間に入っていたので、主催者の大学側との連絡がうまくいかず、双方に間際まで不安があった。結果的にはサンタクロースの力で、集まった500名以上の子供たちを喜びの興奮へと導いたのである。

質問コーナーでそのことがはっきりした。観客席全般に子供が広がって座っていたのだが、ほとんどの子供が手を挙げてサンタクロースに質問をしたがっていた。それは熱狂とも言えるものであった。

もちろん、大人たちの反響も大きかった。この公演に参加した大人たちからはファッションショーの方は別として、サンタクロースが導く夢の空間に酔いしれ、童心が蘇ったようだと言っていた。

宗教的な関わりとは別に、サンタクロースが現在の日本社会において、夢を与える人物として大きな存在感を持っていることが実証された。今後、山口市をはじめ地域の各所の人々との交流の輪が広まっていくことを支援したい。

3. クリスマスファッションショー「サビエルは海から、サンタは空から」の企画

筆者は1996年12月に完成した山口魔法の屋根と呼ばれる球体アーケード（米屋町商店街振興組合と道場門

前商店街振興組合共同設置)の落成イベントの企画・演出をしたことがきっかけで、聖フランシスコ・サビエルと大内義隆公との関わりやその時代と現代を融合させるテーマで約10年間ファッションショーをしてきた。

2010年は山口市とサビエルの出身地スペインナバラ州パンプローナ市との姉妹都市締結30周年記念の年である。同時にはじめに述べたように、大内氏による開府650周年記念の年にも当たる。山口が国内外に対して日本のクリスマス発祥の地としてのイメージを発信する非常によいタイミングであり、またラップランド大学と山口県立大学との交流がはじまり、サンタクローズの町がより身近になる可能性がある。

こうした状況を踏まえてクリスマスファッションショーのタイトルを「サビエルは海から、サンタは空から」とした。この数年間は自然とともにある都市山口の魅力を発掘するために、田園や海に注目し、山口でしか味わえないあるいは形成できないライフスタイルを提案することをテーマにしてきた。

田園のテーマは非常に身近であり、モンペや袴など身近で見ることができ、体験もしやすい環境にある。しかし、海に関しては漁業やマリッジはなかなか身近に情報を得ることはむづかしく、また体験も容易ではない。

しかし、新しい領域として海をテーマすることにした。筆者はそのために、2009年からボートの運転免許を取り、まずは山口の瀬戸内海側の海で研究室スタッフを乗せて自然を探索した。しかし、その経験からボートは目的性がある移動手段であり、ガソリンの垂れ流し状態と思えるほどにコストがかかる。

田園や海とともにあるライフスタイルに求めるものは、スローライフであり自然と調和し、地球環境にも優しいことが期待される。そこで、ヨットに会い、風と一体となって動くクルーザーとともにあるヨットライフの経験が一つのマリッジファッションを提案するきっかけになるのではないかと考えた。

1960年代から1980年代にかけては日本でもマリッジの中心はヨットであったが、現在は下火となっており、今はウェイクボードやマリッジジェットなどが人気である。また、若者の間でも釣りがブームとなっていて、多くのメディアで取り上げられる現状になっている。

そこで、筆者は自分の信念に基づいてエネルギーがほとんど自然の力だけであるということ、つまり風や波の力と共同で走り、楽しむことができるヨットのあ

るライフスタイルを体験することとした。そして研究室スタッフともトレーニングをともにした。ヨットには幾種類ものセールや小さな機材そして多様なシート(ロープのこと)が用いられる。

体験の中から造形的なヒントや自然と共同する方法などを学び、そこからデザインの企画およびディレクションをしたのである。特に詳細については次章にてデザインおよび制作をした田村未奈美が山口ネオマリッジファッションのところで述べる。

4. 地域資源と服飾デザイン (田村未奈美担当)

筆者は今回、山口県立大学・ラップランド大学ファッション&アートイベント2010 Xmas Inspirationの中のクリスマスファッションショー「サビエルは海から、サンタは空から」において、「山口ネオマリッジファッション」というテーマで10点の作品を発表した。

山口県は三方が海に開かれた土地でありながら、マリッジ文化、マリッジレジャーが特に盛んというわけではない。海岸統計によると、離島を含む海岸線の延長は山口県では1,573kmにも及び、全国6番目の長さである。土地面積の大きい北海道や離島の多い長崎県が上位になるが、本州だけでみれば山口県は1位となり、地形的に海との関わりが深いことがうかがえる。そこで、山口の自然資源、山口らしさをアピールし、山口から発進していく海をステージとした新しいライフスタイルを感じさせるファッションの提案をする。

今回の提案では、「地域資源」を山口の自然資源である「海」、そして、柳井市の伝統織物柳井編、藍染め、草木染め、山口緑の素材として定着しつつあるデニムなどの「素材」という二方面から捉え、研究を行った。

最初に、草木染め、藍染め、デニムを用いた5点の作品を制作した。そして2010年9月に山口県宇部市のココランド山口宇部で行われた「癒し&Relaxフェア山口」にて発表した。

ジーンズのベルトループとパーメックスを効果的に使用し、海辺での風や日差しを考慮したジャケット、トップス、簡単に2wayの着こなしが可能なパンツ、ストール、そしてロングスカートになるドレスを制作した。(写真9~12)

次に、ヨットのセールの折りたたみ方、海上でのロープの結び、セールのステッチをモチーフにした作品3点を制作した。パターンは単純な三角形であるが、より立体感が出るように素材はフェルトを使用した。また、白いマキシ丈ワンピースにはヨットの部品である

セールガードを使用している。(写真13～16)

最後には、柳井縞を用いた男女1点ずつのジャケットを制作した。コンセプトは「折りたたむ」である。メンズのボトムは1800年代のデッキパンツを再現した。(写真17、18)

最初の5点では、動きやすさ、着替えやすさ、シンプルをキーワードに、次の3点では、イメージとディテールの表現に力点を置き、最後の2点では衣服の平面性や直線断ちと身体の曲線美の対照性の表現に力を入れた。それぞれの作品のモデルに感想を聞いたところ、着心地や印象の面で好評を得ることができた。今後は、より実生活に活用できる機能性の充実やリアルクローズへの落とし込み、実際に海という場面での実験を行い、リアリティー溢れる作品にしなければいけないということが課題である。

今回、ステージの両サイドに作品のアップの動画を映し出し、ステージと客席の距離を考慮した結果、ディテールを効果的に見せることが可能になった。また、ダンスの講師によるモデルの本格的なウォーキング指導に時間がとれたことで、広いステージでもボリュームのあるパフォーマンスを見せることができた。このように、有意義で貴重な体験をさせていただいたことに感謝したい。

5. 共同作業が感動を生む

今回はクリスマスファッションショーは、研究室の企画から大学主催の「クリスマス・インスピレーション」の事業の一環になり、制作において助けられたと同時に混乱も生じた。出演者は全体で100名を超えており、観客収容数は1500人規模の会場である。舞台関係のスタッフの他に、制作サイドのスタッフも50名を超えた。

研究室の4年生大熊和樹は自身の研究である山口オリジナルクリスマスソングコンテストの実施と普及に関する活動、さらにショーでは優勝者の斉藤あきら氏のコンサートのマネジメントなどをこなしながら、制作チーフの木村泰則氏の助手として、クリスマス・インスピレーション全体の制作活動を担った。研究室ゼミ生3年生の鮎川真琴は大熊と同じ制作助手をしながら、チラシ、ポスター、プログラムのデザインをした。

大学院ゼミ生1年生の松永美代子と木村和枝は、第2部のトントウ役の大殿小学校やリル・レイ・ダンススタジオの子供の衣装および受付スタッフの衣装を担当した。特にトントウ役の子供は総数が51名で、同じデザインの衣装を手軽な値段で購入することは至難であ

り、山口県から福岡県までの格安で手に入る店を奔走した。

しかし、小さな子供の2着がどうしても手に入らず、別のデザインになり、それらを小学生の合唱グループに渡した。後日談であるが、2名の児童は自分たちだけがデザインが異なるということで、出演しないと申し出たそうだ。2名だけがフードになっていたのも、赤いとんがり帽子を両親が探し、やっと出場にこぎつけたと聞いた。

衣装担当としては、精一杯、努力したのだが、小さな子供たちの心理を満たすことはできなかった。今回は非常に短い時間に企画して、提案したのだが、大殿小学校合唱部の奈岡先生やPTAの方が快く承諾してくれたおかげで、実現した。

しかし、衣装集めにおいては時間がなく、研究室としては自分で自分の首を絞めることになった。どのような企画においても十分な時間の余裕が必要である。しかし、往々にして実際にいろいろなことが起きて慌ただしい思いをすることになる。

今回は「赤い服を着てサンタクロースと交流しよう」というキャッチコピーをチラシに掲載していた。主催者側として、ゼミ生の松永と木村が赤いとんがり帽子を作って、受付やスタッフに被ってもらった。こうした会場全体の環境の演出は大切な部分でもある。

ゼミ生の田村智香はアルバイト先の女性から素敵なカードを会場で手渡された。そこには、「子どもと一緒に赤い衣装を作って、会場に行くことを今かと楽しみにしています。ショー頑張ってくださいね。」というセリフが書かれていた。観客と主催側との心が通うカードである。

こうした大規模な公演では多くの人々が舞台と観客との間を取り持つためのマネジメントをする。いろいろな企画を皆が出し合い、実行する。それが、自分たちの予想を超えたりアクションを生み出す。それがフィードバックすることで公演をする側に感動を生み出し、また次の表現へのモチベーションを生み出す。こうした、双方の連鎖が公演芸術の実行の力となる。

第2部は「フィンランドからサンタクロースがやってくる」というキャッチコピーのごとく、サンタクロースが要である。しかし、ロバニエミ市の派遣ということで、直接連絡をとることができなかったのも、ショーの流れを作る上で困難があった。制作の木村氏が打ち合わせをしたのはショーの前日であった。

このような状況であったので、まずは山口サイドでできることをしようと考えた。特に日本ではサンタク

ローズとトナカイという組み合わせが一般的である。2000年にサンタクロース村にはじめて出かけた時は、雪が積もっており、そこに大きな雪のスロープが作られていた。そこで楽しそうな赤い服を着てとんがり帽子を被った子供たちが楽しそうにスロープから滑り下りて楽しんでた。

同行した知人にあれはなんですかと聞くと、トントゥだという。その時にはじめて筆者はサンタクロースのお手伝いをする妖精トントゥの存在を知った。北欧の国々では表現は異なるが、こうした妖精の存在が信じられており、いろいろなところに登場する。実際にトントゥもクリスマスに限らず、家の中や動物の小屋などいろいろなところに出てくる小人の妖精なのだ。

そこで、第2部の演出のテーマをトントゥと位置づけ企画を考えた。ちょうど、フィンランドでのワークショップを間近に控えていたので、ラップランド大学で資料収集をしようと考えた。実際、現地の学生に歌詞や譜面をダウンロードしてもらい準備が整っていた。ワークショップの最後の日、11月11日の昼過ぎに日本からの最後のメールチェックをしたところ、大殿小学校合唱部に繋げてくれたゼミ修士生磯部素男氏からメールが入っていた。

大殿小学校で具体的な内容が示せないの、かなり厳しい反応であった。特に、トントゥの歌については感じがまったくわからないから、資料がほしいということであった。そこで、急遽、すでにスーツケースに仕舞い込んだビデオカメラと楽譜を取り出し、ワークショップに参加した学生たちに歌ってもらった。曲は「トントゥたちのクリスマスの夜」で、日本語にはターニャ・セヴリンスカヤに訳してもらっていた。

5～6名の学生にデザインの教室の一部を借りて歌ってもらった。すると、学生たちは銘々に歌の歌詞に合わせた振りを入れて歌っていた。それを筆者が撮影した。非常に有名な曲でフィンランド人なら誰でもが歌えて、また仕草や踊りもできる。これはきっと山口で楽しい合唱になると確信した。

帰国後に木村氏と磯部氏の両氏に同行してもらい、大殿小学校にでかけ交渉をした。具体的なDVDを見せたので、今回はスムーズに交渉が成立し、小学校側の担当の先生方から快い承諾を得ることができた。このシーンに、大学の近くにあるREI・KOが主宰するリル・レイ・ダンススタジオの子供たちが踊りで参加することになった。

当初はリハーサルが当日の本番直前しか難しいとい

うことで心配をしたが、当日はすばらしい共同作業となり、楽しい歌のプレゼントをサンタクロースにすることになった。

サンタクロースにショーの終了後に、改めてトントゥのコンセプトを話したところ、事前に聞いていたらもう少し、話の内容が変わったとコメントした。時間の関係で打ち合わせなど役割分担をしており、連絡がうまく行かないこともあった。

また、木村氏のコメントでは、打ち合わせをする時間が少なかったので、皆が自分が今抱えていることを誰に判断を仰いだらいいかわからないという苛立ちがあったと聞いた。また、仕事内容の役割分担も慣れていないことがあり、ダブってしまい、無駄な動きをすることも多かった。

学生たちも同様な意見であった。ゼミ学生の場合には、ゼミの主催のイベントの場合には、小回りが利きまた思ったような動きをやりやすい。しかし、大人に交じって役割をきちっと果たすことは容易ではなかったようだ。制作の木村氏と筆者のゼミ学生そして筆者は、長時間に亘る準備を経て、ようやく本番を迎えたのである。

当初は次のようなことを恐れていた。小学校低学年が後半のサンタクロースとの交流会まで静かに待てるかどうか、1500名の観客席が埋まるかどうか、ショーが安全に滞りなく運営できるかどうか、そして何よりもサンタクロースとの共同作業がうまく行くかどうか。

結果は小雨が降る月曜日の夕方の公演にも関わらず1000名を超える観客が来場した。そして子供たちはファッションショーをも楽しく鑑賞し、休憩をはさんでサンタクロースとの交流では歓喜をもって楽しんだ。本当にサンタクロースは子供も大人も楽しくさせてくれるマジシャンなのだ。

大学の多くのスタッフの助けがあったおかげで、駐車場や入口、出口の混乱がなかった。この場を借りてお礼を言いたい。受付には会場で飲食をしているものがあるとか、写真禁止と言いながら、撮影しているものがあるなど、多くの苦情がきた。それを見事にさばってくれた。

公演は舞台だけでなく、制作のマネジメントも同様に重要な役割を果たす。今回は特にこの種の内容に慣れない大学スタッフが制作スタッフを担ったわけだが、皆が自分の役割を想定して、自発的に動いたことが功を奏したと言える。

公演の舞台側、制作側そして出演者と観客などそれ

ぞれの人々の共同作業があって、公演は成り立つものである。信頼関係をもって共同作業が行われることで、新しい関係が生まれ、新鮮な感動を導き出すことができるのだ。

6. まとめ

2002年からはじまったクリスマスファッションショーは、クリスマス・インスピレーションという大きな器の中に入り、子供から大人までの多様な観客を迎えて実現することができた。それは、主催者はもちろんだが、ロバニエミ市の破格な厚遇によることは大きい。サンタクロースに加え、共同研究の相手であるラップランド大学デザイン学部の3名の教員と1名の学生をこのショーのために派遣してくれた。

まったく、当初に予想もつかない夢物語が実現したのである。地域資源を活用した服飾デザインを社会化し、国内外に発信するためにはそれにふさわしいステージ作りが不可欠である。国際的な規模でこうしたステージ作りをするためには、アートマネジメントの手法を学び、実践することが必要である。

筆者は2005年に、サビエルの故郷であるナバラ州立大学主催の交流パフォーマンスに学生とファッションショーをするためにでかけた。聖サビエルと大内義隆公へのオマージュであった。サンタクロースの町ロバニエミ市が山口県立大学とラップランド大学との学長間の引き合わせで、山口市に対して強い関心を持ったことが、今回の5名の派遣に繋がったと考える。

ロバニエミ市のビデオや写真で地域の人々にサンタクロースの町の魅力を宣伝するだけでなく、地域の人々の交流に広がって行くように、クリスマス・インスピレーションが役に立てたらと考える。さらに、市民同士の交流が継続的に活発になって行くような仕掛けをこれから考えていきたい。

多くの人の繋がりと感動を生み出すアートマネジメントによって、山口の地域における創造性が喚起され、地域文化が活性化することを期待している。また、そのために具体的に役立っていききたいと考えている。

参考資料

「クリスマス・インスピレーション」プログラム

①表紙

山口県立大学・ラップランド大学 ファッション & アートイベント2010

「Xmas Inspiration」

日時 2010年12月13日 (月)

場所 山口市民会館大ホール・展示ギャラリー

主催 山口県立大学

企画 国際文化学部文化創造学科 大学院国際文化学研究科 国際化推進室

協力 フィンランド・ロバニエミ市 ラップランド大学
山口市立大殿小学校及びPTA スタジオ・レイ

後援 山口市 山口市教育委員会 山口商工会議所
日本のクリスマスは山口から実行委員会

山口日本フィンランド協会

②ページ

主催者挨拶 山口県立大学学長 江里 健輔

山口県立大学は、「国際化への対応」を教育理念の一つに掲げ、これまで「地域と世界をつなぐ大学」としてさまざまな国際交流活動を展開してきました。特に、本年4月には、フィンランドのラップランド大学と学術交流協定を締結し、また一つ、世界につながる大学としての翼を広げることができました。

ラップランド大学はフィンランドの北極圏にあるロバニエミ市に所在し、デザインや服飾等の分野において先進的な教育研究がなされ、本学にとっても大変有益な大学であります。

本日の「クリスマス・インスピレーション」は、このラップランド大学との学術交流協定を記念するとともに、「日本のクリスマスは山口から」実行委員会とも連携し、大学の地域貢献活動として、国際文化学部文化創造学科と大学院国際文化学研究科の学生・大学院生が中心となって企画・開催したものです。同学科は、平成19年度の学部再編により創設され、平成22年度に最初の卒業生を世に送り出すこととなります。

その教育の特色は、国際的な視野から日本における地域の歴史や文化を調査研究し、地域発のオリジナルな文化を創造・発信することを目指し、日本文化系・企画プロデュース系という二つの体系から、地域と関わりながら文化の発展に寄与すべく教育研究を進めており、今後の発展を大いに期待しているところです。

また、ラップランド大学のあるロバニエミ市は「サンタクロース」の故郷として世界的に有名で、毎年多くの観光客が「サンタクロース村」を訪問しています。本日は「サンタクロース村」から本物のサンタクロースもやってきます。同市の紹介と異文化理解の促進の一助となればと願っています。

最後に、開催にあたり、ご支援・ご協力いただきました関係者の皆様には心より厚くお礼を申し上げます。

イベントコンセプト

水谷由美子（企画デザイン研究室）

本年は650年前に大内氏によって山口が開府された記念すべき年です。16世紀の半ば頃、大内義隆の時代に聖フランシスコ・サビエルが来山したことをきっかけに、日本で最初のクリスマスのミサが祝福されたことが記録されています。

エキシビション（展覧会）は、この歴史的エポックに因み、日本文化系はグループによるプレゼンテーションを、企画プロデュース系ではマスクとクリスマスカードの創作作品を展示します。

また、本年11月初旬に国際文化学部国際共同研究としてラップランド大学にて実施された両大学合同ワークショップにおいて制作した作品を展覧します。共同研究は地域資源を生かしたファッションや生活小物の開発による地域プロデュースを目指しています。

公演では山口オリジナルクリスマスソングコンテストの大賞受賞者の作品紹介、ファッションショー「サビエルは海から、サンタは空から」、そしてサンタクロースとの交流会が催されます。

当イベントのためにロバニエミ市の派遣でラップランド大学教員3名と大学院生1名が来山されています。

両大学の活発な交流が、ロバニエミ市と地域の皆様方との交流へと広がっていくことを願っています。

③ページ

ステージプログラム

18:30 開演

オープニングセレモニー

主催者あいさつ 山口県立大学学長 江里 健輔

来賓あいさつ ラップランド大学学長

マウリ ウラ・コトラ

第1部

18:40 クリスマスソング演奏

「山口オリジナルクリスマスソングコンテスト」大賞曲発表・演奏

曲名「はじまりの街で」

斉藤 アキラ（山口県立西京高等学校3年）

18:50 クリスマスファッションショー

テーマ「サビエルは海から、サンタは空から」

文化創造学科 企画プロデュース系 企画デザイン研究室の学生による、山口の歴史芸術分野の発展に影響を与えた「大内文化」と「クリスマス発祥の地、山口」のふたつの要素を取り入れたファッションショー

Part 1

国際共同研究ワークショップ作品 2点

Sanna Konola / Tiina Meriläinen

（ラップランド大学大学院生）作品 4点

Part 2

田村未奈美「山口 ネオマリンファッション」 10点

貞木 梨沙「ひかりとうねり」「スバリゾートウェア」
4点

田村 智香「家庭菜園に着想を得た

スローライフファッション」 6点

武永 佳奈「ヤマグチズムファッション HAKAMA」
7点

19:20 10分休憩

第2部

19:30 サンタクロースがやってくる！

ラップランド大学の所在するフィンランド・ロバニエミ市のサンタクロースと子どもたちの交流を通じて異文化理解の促進と山口の地域づくりに貢献する

■ダンス「ソリすべり」

リル・レイ・ダンススタジオ

■ファッションショー

テーマ「クリスマスのためのパーティファッション～Eco×Xmas」企画プロデュース系「服飾デザイン実習」履修生の作品発表

■キッズファッションショー

「私がサンタ！」大学院生によるファッションワークショップ成果発表

■サンタさんへの質問コーナー

サンタさんに質問してみよう！

■サンタさんへのプレゼント

山口市立大殿小学校合唱部による歌のプレゼント

♪「歌よありがとう」

作詞：花岡 恵 作曲：橋本祥路

♪「トントウたち（妖精）のクリスマスの夜」

編曲：田村 洋

■フィナーレ

♪「サンタが町にやってくる」全員合唱

さいごのページに歌詞がのっているよ。みんなで歌おう！

20:00 終演

④ページ

出演者

総合司会 間田 敬子 (フリーアナウンサー)
挨拶 江里 健輔 (山口県立大学学長)
マウリ ウラ・コトラ
(ラップランド大学学長)

第1部

山口クリスマスソングコンテスト優勝者

斉藤アキラ (山口県立西京高等学校3年)

クリスマスファッションショーモデル

沖本 愛 中野 愛美 八木 彩夏 浜口 美穂
首藤 悠希 森光 由樹 今村 一至 澄川 千容
水津 界 安富 遥 越口こずえ 福田まなみ
藤本 知央 廣津奈緒子 小山 華奈 竹部 徳真
山本小百合 板垣 成美 末永 友紀 梶山 朋花
加賀みずき 日高 彩葉 岡田 麻里 吉武 浩子
曾我部宏美 中村 和美 守本 真麻 且 春奈
河村 佳美 頼木 優花 河野奈津美 樋口 要子
井上 裕希

第2部

スペシャルゲスト サンタクロース

山口市立 大殿小学校 合唱部 (トントウ)

倉岡 瑞姫 梶井明日香 大谷 龍生 本田野々花
鈴木 彩音 末永 真由 藤川 詩 新川 未奈
中山 涼花 杳内 香純 山中 美空 水長 実優
伊藤 美紅 白坂 緋里 中野 美空 西岡 愛美
林 花音 渡辺 紗恵 塚本 真衣 井領沙瑠菜
新川 世奈 内海 百花 江幡 聡史 松本 美柚
柳井 希心 倉本 美佳 林 実咲 藤井 七海
藤川 美 藤村 紫 塚本 結衣 北村 明惟
渡邊 紗羅 本田 芽吹 西村 七海 宇多田百香
若松 真由

(指揮者) 忝岡健治 (山口市立大殿小学校 教諭)

(ピアノ伴奏) 杳内美奈子

リル・レイ・ダンススタジオ "Dancin' Angels"

Kayo 升岡 梨恵 山本 光輝 池田 稜平
石川 信 真田 友希 鳥丸 明依 金原早友子
野原 玲奈 野村ちさと 伊藤 優希 福田 有紗
大野 美琴 國守 胡桃 鈴木 芽衣 山形ほのか
河野 真奈 高橋 直樹 中村 吏佐 弘中 花穂
藤田 友希 松浦 杏紫 藏重 舞香 西村美薫子
秀山 輝 吉富 月麗

キッズファッションショー「私がサンタ！」

山村亜理沙 堀 亜里沙 矢野 捺実 磯部爽太郎
岩野 莉耶 シャルコフ紗良 斎藤 優晋 田辺 萌絵
兼森 千歩 津村 奈々

ファッションショーモデル

上利 朋子 吉長 実穂 杉山 優貴 川上久美子
ユリカ コルデロ エイザギレ

⑤ページ

展示

■展示ホール (13:00 開場 21:00 閉場)

国際文化学部 文化創造学科の学生による

プレゼンテーション発表および作品展示

◆発掘 (文化創造学科 日本文化系)

クリスマス及びサンタクロースに関する日本及び山口における歴史や文化をアカデミックにアプローチし、スライドショーやパネル展示を行う

●安光研究室「クリスマスに読みたい絵本」

●稲田研究室「キリスト教関係の新作能」

●木越研究室「『野田版鼠小僧』の三太とさん太
—大江戸師走廿四日

(はなのおおえどのくりすます) —

●伊藤研究室「サビエルのきた道」

●池田研究室「クリスマスの計量的分析」

◆創造 (文化創造学科 企画プロデュース系)

基礎演習Ⅱ履修生が制作したマスク (サンタ・トナカイ・トントウ) とオリジナルクリスマスカードによる空間演出

◇山口県立大学×ラップランド大学共同研究作品 (2010年版)

●11月8日~11日にフィンランド ラップランド大学にて開催されたワークショップにて制作された衣服作品、生活小物を展示

●各大学における地域資源を活かした作品の展示

◇サンタへのお手紙コーナー

サンタクロースにお手紙を書いてみよう!

■ロビー (13:00 開場 21:00 閉場)

フィンランドの自然・文化の紹介

映像上映、パネル展示などでフィンランドの生活文化やサンタクロースの出身地ロバニエミの自然・風物の

紹介

⑥ページ&⑦ページ
スタッフ

総監督 江里 健輔 (山口県立大学学長)
制作 木村 泰則 (経営企画部長)
企画 国際文化学部文化創造学科
大学院国際文化学研究科 国際化推進室
総合プロデュース 田村 洋 (国際文化学部教授)
総合演出 水谷由美子 (国際文化学部・大学院国際
文化学研究科教授)
コーディネータ シャルコフ・ロバート (国際化推進室長)

●展覧会の部 (山口市民会館展示ホール)
◆国際文化学部文化創造学科学生によるプレゼンテー
ションの部

ディレクター 井生 文隆 (国際文化学部文化創造学科長)

*作品の部

指導 水谷由美子 田村 洋
松尾 量子 山口 光
(文化創造学科企画プロデュース系教員)
参加学生 文化創造学科 企画プロデュース系2年
基礎演習履修生

*パワーポイントの部

指導 伊藤 幸司 稲田 秀雄 安光 裕子
木越 俊介 池田 史子
(文化創造学科日本文化系教員)
参加学生 文化創造学科 日本文化系各ゼミ生

◆山口県立大学×ラップランド大学国際共同研究の部
(平成22年度版)

リーダー 水谷由美子 Marjatta Heikkilä-Rastas,
professor

スタッフ 井生 文隆 田村 洋 小南 英昭
松尾 量子 山口 光 小橋 圭介
Kristiina Hänninen, professor
Päivi Rautajoki, lecturer
Marjatta Hildén, lecturer

参加学生 松永美代子 木村 和枝 (大学院国際文
化学研究科1年)
鮎川 真琴 貞木 梨沙 (国際文化学部
文化創造学科3年)
Anni Heinilä Solveig

MagnusdottirTiina Karvonen
Vuokko Österberg
Päivi Partanen Leila Saanio
Iida Silvennoinen Hanna Turpeinen
(ラップランド大学学生)

協力 柳井縞の会 千々松製紙所
有限会社ナルナセバ 匠山泊

●ロビー展示の部

ディレクター 小南 英昭 (文化創造学科企画プロデュ
ース系教授)
担当スタッフ 小橋 圭介 (文化創造学科講師)
資料提供 ロバニエミ市

●舞台公演の部 (山口市民会館大ホール)

ディレクター 第1部 水谷由美子
第2部 田村 洋
舞台美術 やの舞台美術
照明 山内 浩之
音響 伊藤 音響
進行 Studio Ray
モデル指導・ステージング REI・KO
映像 山口メディア研究所
画像 岡部 隆則 (有限会社ナルナセバ代表取
締役/平成21年度大学院国際文化学研究
科修了生)

写真撮影 志賀 敏彦
制作助手 大熊 和樹
(国際文化学部文化創造学科4年)
制作助手・第2部衣装 松永美代子・木村 和枝 (大学院国際文
化学研究科1年)

グラフィックデザイン 鮎川 真琴 (国際文化学部文化創造学科
3年)
作曲協力(第1部) 高嶋 奏風 (国際文化学部国際文化学科
3年)

(⑦ページ)

ラップランド大学ゲスト
マルヤッタ・ヘイッキラ = ラスタス Marjatta
Heikkilä-Rastas クリステイーナ・ハンニネン Kristiina
Hänninen / パイヴィ・ラオタヨキ Paivi Rautajoki (大
学教授/講師) / サンナ・コノラ Sanna Konola (大
学院生)

◆山口オリジナルサンタコンテスト

企画・運営 大熊 和樹 水谷由美子
 審査員 田村 洋(山口県立大学国際文化学部教授)
 香原 詩彦(株式会社ラグタイム 代表取締役)
 新井 道子(株式会社エフエム山口 アナウンサー)

◆クリスマスファッションショー「サビエルは海から、サンタは空から」

企画・アートディレクション 水谷由美子
 デザイン・制作 田村未奈美(大学院国際文化学研究科2年)
 武永 佳奈 田村 智香
 (国際文化学部文化創造学科4年)
 貞木 梨沙
 (国際文化学部文化創造学科3年)
 Sanna Konola/Tiina Meriläinen (ラッ
 プランド大学大学院生)
 ヘアーメイク 代表 糸賀 義将(ニュースタイル)
 スタイリスト 斎藤 絵美 糸賀 愛子
 井関久美子 小野 千春
 河野さゆり 植田 友香
 (ニュースタイル)
 アシスタント 岡崎 竜次(ニュースタイル)
 協力 大川 利光(株式会社徳山マリン)
 岡部 泰民(ブルーウエイ株式会社)
 柳井縞の会 有限会社ナルナセバ

◆キッズファッションショー「私がサンタ!」

ワークショップ講師 片山 涼子(平成20年度大学院国際文化
 学研究科修士・アトリエa.p.r主宰)
 企画・コーディネート 岡田 奈緒(大学院国際文化学研究科2
 年)
 ヘアーメイク 西脇 末美
 (YICビューティモード専門学校最高顧
 問/平成22年度大学院国際文化学研究科
 修士)
 アシスタント 津田 千里 吉村 舞
 (サロンド・エミール)
 制作指導スタッフ 片山 弘子 門之園桃子
 熊野 初代 佐藤 夏希
 田村 智香 中野 淑子
 西村 孝子 野口 妙子
 藤本 佳代

◆合唱(山口市立大殿小学校合唱部)

コーディネータ 磯部 素男(平成21年度大学院国際文化
 学研究科修士)
 山口市立大殿小学校PTA

◆ダンス(リル・レイ・ダンススタジオ)

振付 REI・KO
 ダンス指導 Kayo Mami

◆クリスマスのためのパーティーファッション

デザイン・制作 上利 朋子 河野 里奈
 杉山 優貴 渡邊 真以
 (文化創造学科服飾デザイン実習履修生)
 ゲスト/ユリカ コルデロ エイザギレ
 (リマ大学教育学部1年・山口県国際交
 流協会研修員)
 作品指導 水谷由美子
 ヘアーメイク 西脇 末美
 アシスタント 津田 千里 吉村 舞
 (サロンド・エミール)

⑧ページ(裏表紙)

サンタが町にやってくる 歌詞
 作詞 Haven Gillespie / 訳詞 タカオ カンベ/
 作曲 J.Fred Coots

さあ あなたから メリー・クリスマス
 わたしから メリー・クリスマス
 Santa Claus Is Coming to Town
 ねえ 聞こえてくるでしょ
 鈴の音がすぐそこに
 Santa Claus Is Coming to Town

待ちきれないで おやすみした子に
 きっとすばらしい プレゼントもって
 さあ あなたから メリー・クリスマス
 わたしから メリー・クリスマス
 Santa Claus Is Coming to Town
 Santa Claus Is Coming to Town!
 『おしゃれなピアノで楽しむ クリスマスソング』 全
 音楽譜出版社より

問い合わせ先
 山口県立大学 経営企画部 企画グループ
 〒753-8502 山口市桜島3丁目2-1
 TEL: 083-928-3417



1 オープニングセレモニー



2 山口県立大学江里健輔学長あいさつ



3 ラップランド大学マウリ ウラ・コトラ学長あいさつ



4 山口オリジナルクリスマスソングコンテスト優勝者発表



5 「はじまりの街で」を歌う斉藤アキラ



6 山口県立大学×ラップランド大学 国際共同研究ワークショップ作品 (2009年度)



7 ラップランド大学大学院生 Tiina Meriläinen による作品 (写真6 右からの展開)



8 ラップランド大学大学院生 Sanna Konola (写真6 左からの展開)
9~19 「山口ネオマリンファッション」田村未奈美



9 藍染のストールと碇マークをモチーフにしたポンチョ



10 マリンペアルック



11 キバナコスモスで染めたフリンジ



12 2WAYの着こなし (9, 10, 11の展開後)



13 フェルトとロープを用いたアウター



14 ヨットの部品セーリングガードを装飾に用いたマキシ丈ワンピース



15 ヨットのセールとロープの結びをコンセプトにした3点



16 ヨットのセールのたたみ方から着想を得たポンチョ



17 柳井縞のジャケットコート

18 柳井縞のジャケットとデッキパンツ

17・18 有限会社ナルナセバからの受託研究
企画・ディレクション 水谷由美子



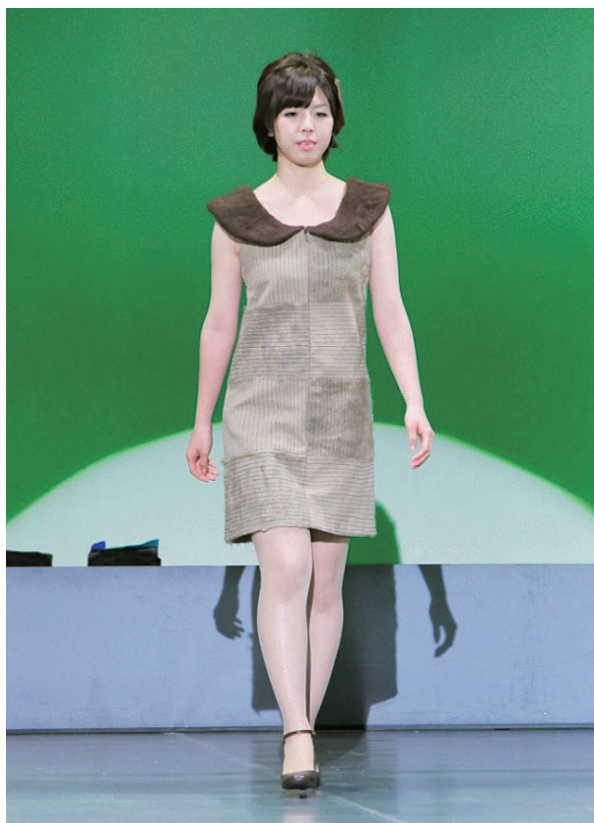
19 「ひかりとうねり」 貞木梨沙



20 LEDの光でホタルを表現(同19左)



21 21~23 「家庭菜園に着想を得たスローライフファッション」 田村智香



22 「土」をイメージしたワンピース



23 「太陽」をイメージしたワンピース



24 24～26 「ヤマグチズムファッション HAKAMA」 武永佳奈



25



26 ヤマグチズムファッション



27 クリスマスファッションショー フィナーレ (前列中央に筆者そして上手側にラップランド大学からのゲスト4名が登壇)



28 リル・レイ・ダンススタジオによるダンス「ソリすべり」



29 「クリスマスのためのパーティーファッション～Eco × Xmas～」



30 企画プロデュース系「服飾デザイン実習」履修生の作品



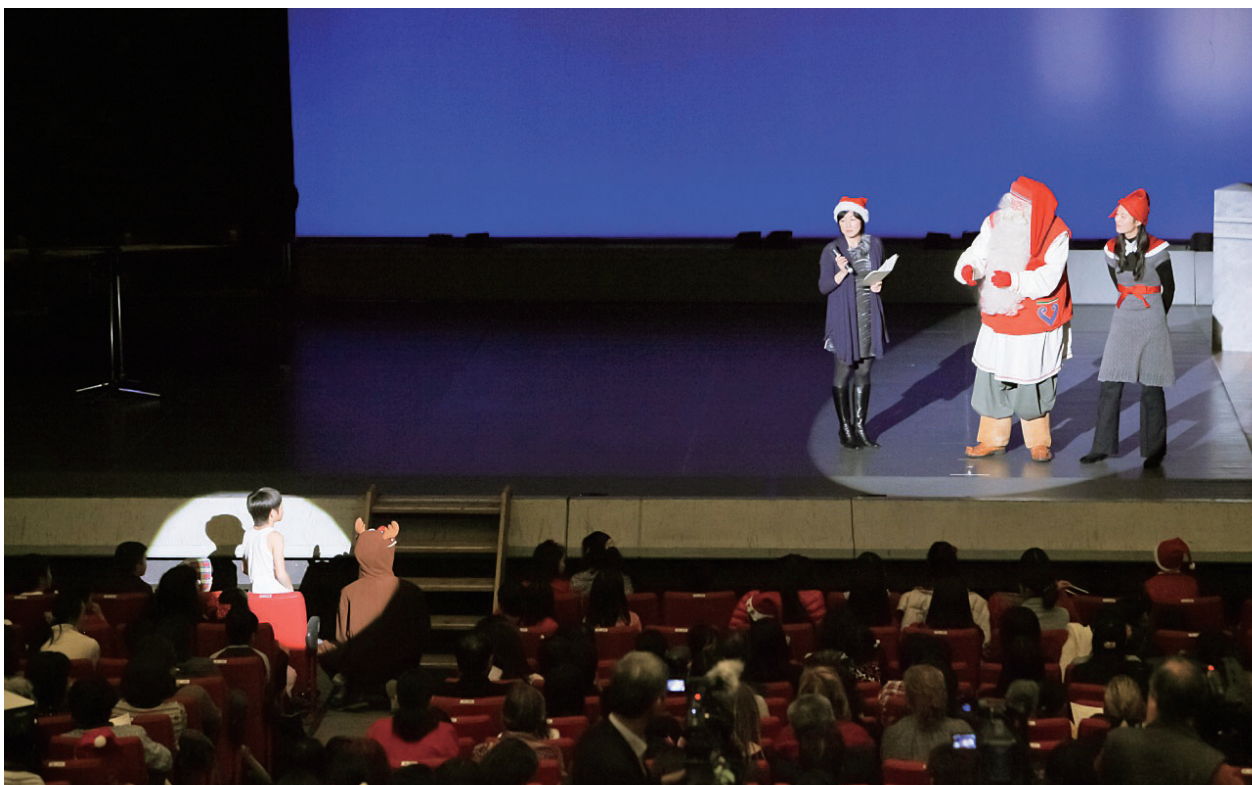
31 キッズファッションショー「私がサンタ!」



32 サンタクロースにアピールする



33 サンタクロースと一緒にポージング



34 サンタクロースへの質問コーナー 会場は盛り上がり騒然となる



35 赤い服を着た2番目の質問者



36 舞台上のサンタクロースと、トントウ（妖精）たち



37 山口市立大殿小学校合唱部による歌のプレゼント「トントウたちのクリスマス之夜」



38 「サンタが町にやってくる」全員合唱 第2部フィナーレ



39 フィナーレ サンタクロースからの挨拶

